

各班 ← プラント班

11/13

プラント班宛

NO. 758

3月26日 3時21分

FAX 送付状

枚数 (表紙含む) 13 枚

ERC プラント班 FAX: [REDACTED]

← 東電内保安院分室 [REDACTED]

件名

東電 記者会見メモ

3/25 11:00~

13:10~

13:35~

17:05~

23:10~

プラント状況（本店レク）議事メモ

2/13

日時 平成23年3月25日（金） 11:00~11:30

場所 本店1F会議室内

対応 原子力運営管理部 [REDACTED] 広報部 [REDACTED]

マスコミ 約60人 カメラ10台

配布資料：

・なし

冒頭に[REDACTED]より、前回のレク（3時50分～）で未回答だった内容（再発防止対策、APD健全性確認、退避の状況等）を説明。

Q. これまで、どのように放射線管理してきたのか。

A. 事前に作業現場の放射線の状況を確認し、作業に伴いどの程度の線量を受けるかを確認して作業に備えている。

Q. 今朝、テレビ会議で対策を周知したとのことだが、テレビ会議はどこから誰に伝えたのか。

A. 今朝9時頃、テレビ会議で本店の対策本部からサイトに周知した。

Q. 24日の管理区域作業員700名に東京電力社員と協力企業社員の内訳は。

A. 内訳は把握していないが、当社社員も含んでいる。

Q. 被爆した3名は電気関係の技術者か。資格は持っているのか。

A. 技術資格の有無は当方では把握していないが、電気工事関係の会社なので、少なくとも電気工事の技術はお持ちの方と認識している。

Q. 本日の作業予定は。

A. 確認でき次第お知らせする。

Q. 本事象に関して原子力安全・保安院からどのような指示がいつあったのか。

A. 統合対策本部に駐在している原子力安全・保安院の方から放射線管理を見直し、改善するよう口頭で指示を受けた。

Q. 放射線管理でない人がサーベイするということか。

A. 主にメンテナンスをする復旧班と放射線管理をする保安班で連携して作業を行うこととしている。現場が異なる状態である場合、保安班にて対応することとしている。当然、現場作業に当たっては、TBM-KYを徹底し、状態が変化していたら中断するよう周知している。

Q. TBM-KYとは。

A. TOOL BOX MEETINGのことで、KYは危険予知のこと。

Q. 今までの指示内容と今回との違いは。特別新しいことは何か。

A. 通常ではない状態でも、高濃度汚染があったことを踏まえ、リスクの可能性を予知

3/13

すること。また、必ず立ち止まることとしている。水で濡れた場合は直ちに作業を中断する点は新しい。

Q. 水はどこからなのか。可能性として考えられるものは。

A. プラント水や雨水など考えられるが不明。わかり次第お知らせしたい。

Q. 中断していた作業はどうしているのか。

A. 今回の指示内容を周知したところから再開している。

Q. 自主性確保の観点で、現場作業員に意思を確認しているのか。

A. 現場では作業班長の指示に従うこととなっている。なお、引き続き放射線管理をしっかりと進めていく。

Q. 高濃度の放射性物質であり、燃料プールの可能性はあるのか。

A. 可能性はある。

Q. 本日の作業状況を教えてほしい。

A. 確認次第、お知らせする。

Q. 作業再開は全号機対象なのか。

A. 全号機対象であり周知が済んだチームから作業再開している。

Q. 放射性管理員の人数がなぜいまだにわからないのか。

A. 3サイトの人員を確認し、そのうち、1Fで実働出来る人員を確認していることから時間を要している(1F:111人、2F:47人、KK:123人。この内、本日は1Fで56人が作業予定と回答)。

Q. 今回の放射線被ばくに関連し、労働基準監督署などの監督官庁の関与はあったのか。現地の立ち入りなどしているのか。

A. 関与している。但し、現地の立ち入りをしているかについては把握していない。

以上

4/13

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時 平成23年3月25日（金）13:10~13:25

場所 本店1F会議室内

対応 原子力運営管理部 [REDACTED] 広報部 [REDACTED]

マスコミ 約60人 カメラ10台

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について（第四報）
- ・福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について（第五報）

プレス文説明後に [REDACTED] より、前回のレク（11時～）で未回答だった内容（放射線管理員の）を説明。

Q. 被ばくした作業員2名が関電工との情報があるが、事実か。

A. 被ばくされたことに加え、個人の特定につながりかねないので、回答は差し控えさせていただきます。

Q. 現状でどの程度作業が進んでいるのか。

A. 後ほどお知らせする。

Q. 海水濃度とタービン建屋地下1階の高線量との因果関係は。

A. 因果関係は不明。

Q. 原因として何が考えられるか。

A. 引き続きデータを確認していく。

Q. 今回はマニュアル上でどのような違反があったのか。

A. 確認する。

以上

5/13

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時 平成23年3月25日（金）13:35～14:35

場所 本店1F会議室内

対応 原子力運営管理部 原子力設備管理部 [REDACTED] 広報部 [REDACTED]

マスコミ 約60人 カメラ10台

配布資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて（3月25日午前9時現在）
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機 プラント状況

プレス文説明後に質疑応答。

Q. 1Fでの作業進捗状況を教えてほしい。

A. 電源関係は、1F1～3T/B1階と地下の作業中止。1F2の中央制御室照明を夕方復旧予定。また、1F6RHR S系の電源を発電機車から外部電源へ切替。

注水関係は、淡水確保の上、3号機原子炉への注水を明日までに行いたい。また、海水から淡水への移行することを目指しており、純水補給水・復水補給水・仮設ポンプでの給水を次回紹介したい。

Q. 3号の水たまりを排水したとの情報があるが、排水しているのか。

A. 排水の詳細は分からない。はじめているとの情報はある。

Q. 海水注水により機器損傷に関する影響は。

A. 一般的にいうと、腐食が発生しやすい。設備健全性維持の観点から淡水は有効。

Q. 復水補給水系、純水補給水系、仮設ポンプの決定が遅れているが、純水補給水をなぜ選択していないのか。

A. 1F3の事例を踏まえ、再検討している。優先順位はなく、出来るものを導入することとしている。

Q. 復水補給水系と純水補給水系のスペックに違いはあるのか。

A. ほぼ同じスペック。

Q. 福島医大から放医研に搬送された3名の症状は。

A. 確認出来ていない。

Q. 1F1～4のRHR系進展は。

A. 1F3のDC電源復旧中であり、これが復旧されるとポンプ起動や遠隔操作が可能となる。1F3電源復旧にて他号機の電源確保が可能となる。1, 2号機へはケーブルを敷設する必要がある。

Q. 1F3タービン建屋1階の作業が中止されているというのは、1階にも汚染水のエリアがあるということか。

6/13

A. 関係ないと思うが、確認したい。

Q. 現在、外部電源で動いているものを教えてほしい。

A. 1号中央制御室照明、2号中央制御室照明（本日夕方予定）、3号中央制御室照明および4号機は外部電源受電のみ。5、6号はRHRポンプおよび5号RHRSポンプ、6号RHRSポンプ（本日夕方予定）

Q. 1F3タービン建屋地下1階は水があるのは分かったが、タービン建屋1階が作業禁止な理由は何か。1階は浸水しているのか。

A. 確認したい。

Q. 1F1/2号機のタービン建屋で作業を禁止しているのは、3号と同様な理由からか。また、水の深さはどれくらいか。

A. 確認したい。

~~Q. 1F1/2号機のたまり水も放射エネルギーが多いのか。~~

A. 高めであると聞いている。

Q. 1F3の汚染水からすると、原子炉の水と判断してよいか。

A. C-60以外は核分裂生成物でありその可能性もある。

Q. 通常より10000倍の汚染水ということであり、原子炉内の水とみてよいのではないか。

A. 今後調査したい。

Q. 1Fでのけが人の現状を教えてほしい。

A. 地震発生時、重傷2名、軽傷6名、行方不明2名の合計10名
復旧作業中、軽傷17名、症状不明2名の合計19名

Q. 厳しい作業が続いているが、進捗がみられない。原子力部門のベテランを揃えて決死隊を作らないのか。

A. 年齢関係なく、一丸となって対応しているところ。

Q. 1F4のSFP注水状況は。

A. 6:05~10:00頃で注水しており、コンクリートポンプ車は使っていない。今後は未定。

以上

7/13

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時 平成23年3月25日（金）17:05～18:05

場所 本店3F大会議室

対応 武藤副社長 原子力運営管理部 ██████████ 原子力設備管理部 ██████████ 広報部

マスコミ 約60人 カメラ10台

配布資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて（3月25日午後3時現在）
- ・福島第一原子力発電所プラント状況等のお知らせ
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機 プラント状況

プレス文説明後に質疑応答。

Q. 地震発生直後、武藤副社長は現地入りして指揮をどうしたが、1F1、1F3の爆発に遭遇した。電源車を派遣したものの機能しなかったのか。

A. 電源車を持って行ったが、津波の影響で、つなぐ場所が海水につかりつなげなかった。

Q. 爆発前に海水を入れる判断は出来なかったのか。

A. 一定期間は余熱でタービンを回すことで冷却機能を有していた。その後、淡水で補給していたが、淡水が不足したことから、海水注入することとしたもの。

Q. 爆発してから注入するのでは遅いのではないか。

A. 海にポンプを入れる手だてを講じており、最大限努力した結果である。

Q. 12日にクリントン長官が米軍機に冷却材を積んで緊急に向かうとの打診を東電は断ったということを保安院から聞いたが、どうして断ったのか。

A. 申し出を断ったとの認識はなく、東電に打診があったかを含めて確認する必要がある。

Q. 津波に関して、東電は869年に発生した貞観（じょうがん）地震の教訓を生かしていないのではないか。

A. 869年に発生した貞観（じょうがん）地震については理解しているが、H21年頃の一部の津波想定モデルとして出されていると認識している。土木学会など知見として定まったものがなかった。

Q. 1F3の水はどこから出たものと考えているか。

A. 特定出来ていない、高い放射能を持っている水であり、燃料から出たものと推定している。

Q. その後作業を申断せざるを得ない状況であるが、打開策はあるのか。高線量だと何も出来ないではないか。

A. 水を除去する手だてを検討中。

8/13

Q. 今回、東電は未曾有の津波被害を受けた一方、設置許可申請を合格しているがその中で東電の責任は。

A. 我々としては、その当時の最新の知見を反映した情報をもとに、設置許可を申請していたが、当社として想定していた津波をはるかに超える津波により、このようなご迷惑をおかけすることとなり大変申し訳ない。

Q. 電源をつないで、注水ポンプをつないで注水することであったが、今後の予定を教えてください。

A. プラントの中のポンプを使うのが一番良いのだが、被ばくを踏まえ、別の注水手段として、原子炉圧力容器の中に消火系配管を使って淡水を送り込むことを考えている。これにより原子炉の中の水を熱交換し冷却する。

Q. 1号機、2号機でも水たまりが見つっていると聞いているが、どれくらいなのか。

A. 詳細は分かっていない。別途確認したい。

Q. 原子炉建屋からタービン建屋に主蒸気が入ってくるラインで水漏れが見ついている。主蒸気系か復水系で弁は閉じているが、そこから漏れているとすることは考えられるのか。

A. 原子炉建屋、タービン建屋をつながる配管はたくさんあるので、現段階で推定するのは難しい。

Q. 原子炉注水の淡水切替の件について、1号機以外はどうするのか。

A. 1号機については切替完了。2号機、3号機は今後淡水に切り替える準備をしているところ。

Q. 1F3排水はどこにどういった形で排出しているのか。

A. タービン建屋の排水は放射能の濃度を確認しつつ、いろいろな手段から検討しているところ。

Q. まだやっていないということでしょうか。

A. まだやっていない。

Q. たまり水の処理にはどのくらいかかるのか。

A. 現時点でどの程度かかるかわからない。

Q. 大きな津波が発生すれば、タービン建屋内に水がたまることは想定できたのではないか。想定していたのならばもっと早く排水処理等、復旧作業に取り組めるのではないか。

A. 津波による海水が流入したかどうか、経路は確認中である。また、早急に復旧活動すべく、全力で対応しているところ。

Q. 1F3のたまり水は炉内から漏れ出た可能性が高いと言うことか。

A. 流出経路は分からないが、核種から想定すると炉内や使用済燃料プールの可能性が考えられる。ただ、プールには水が入っていると思われるので、炉内の水が何らかで漏

9/13

れ出ている可能性が考えられる。

Q. テクネチウムが海水から検出されているが、大気中からも検出されたのか。

A. 大気中からは検出されていない。

Q. タービン建屋地下のたまり水については、配管やポンプなどから漏えいした可能性はないのか。

A. どこからどのように漏えいしたかは現時点で確認できていない。

Q. タービン建屋の機密性はなく、外部へ放射性物質が漏れだして行くのではないのか。

A. 建屋外に対する機密性はできている。

Q. 昨日タービン建屋で被ばくした3名の氏名はなぜ公表しないのか。

A. 被ばくされたこともあり、また、個人の特定につながりかねないので公表は控えさせていただいている。

Q. 2005.7、2006.3に国会答弁において、地震による冷却システムの喪失について取り上げられていたが、東電として何らかの対応はしていなかったのか。

A. 今回の被害は地震によるものというより津波による影響が大きかったものと考えている。

Q. 津波で非常用ディーゼル発電機が故障したと思われるが、地下に設置してあることが問題なのではないか。

A. これまでの知見をもとに津波も考慮して設計している。今回のマグニチュード9.0で且つ、領域が連動するような地震については想定していなかった。

以上

10/13

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時：平成23年3月25日（金）23:10～24:00

場所：東京電力本館1階AB会議室

先方：記者約50名（カメラ11台）

当方：原子力設備管理部

柏崎刈羽

広報部

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所プラント状況等のお知らせ（3月25日午後7時30分現在）
- ・【別紙】福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・【別紙】福島第二原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機プラント状況
- ・福島第一原子力発電所1号機タービン建屋地下の溜まり水の測定結果について

Q. 1F1タービン建屋地下1階にある水溜まりの総濃度はいくつか。炉水の何倍か。

A. 3.8×10^6 bq/cm³。炉水の約1万倍。

Q. いつ測定したのか。

A. 24日の9時40分に水を採取し、2Fに持って行って17時40分に測定を開始した。結果が出たのは、24日18時頃。

Q. 3号機は、何時に採取したのか。昨日の被ばくした作業の前にはとっていないのか。

A. 24日21時。被ばくがあつて採取した。

Q. なぜ1号機は採取したのか。

A. 1号機ではすでに水があることが分かっていたため、水処理作業を進めていく上で、どうするか検討する必要があつたため。

Q. 水たまりの状況は。

A. 各深さ最大で、1号機は400ミリ、2号機は1,000ミリ、3号機は1,500ミリ、4号機は800ミリ。

Q. 2号機は1メートル、3号機は1.5メートルと水深がかなり深いが、これは全体的にこの深さなのか。

A. 場所によって異なる。

Q. 3号機は、なぜ水を調べようと思わなかったのか。

A. まずは1号機で採取して、ほかを評価しようと考えていたもの。

Q. 水たまりは、すべて地下か。

A. その通り。

Q. 空間線量は。

A. 確認する。なお、1号機の水表面の線量は200mSv/h。

Q. 排水先は。

A. プラントごとに検討が必要だが、1号機は復水器に入れるのが1番いいのではないかと考えている。

Q. なぜ今頃公表したのか。被ばく者がいなければ公表しなかったのではないか。

A. お知らせはする予定だったが、まずは、被ばくされた方と共に3号の状況をお知らせすることを優先したものだ。ただ、今考えると、もっと早く公表すべきだった。申し訳ない。

Q. 核種は3号機と比べて特徴的なものはあるか。

A. 1号機では、塩素、ヒ素、イットリウムなど、プラントの構造材が放射化してできたものがみられている。しかしながら、発生起源については、現時点では何ともいえない。確認していきたい。

Q. 水たまりができたことで、遅れた作業は。

A. 補給水系関係のポンプ復旧作業。ほかでは、ケーブルの引き回し作業。これについては、地下で引き回しを計画していたものについては、ルートの変更をして作業を進める予定。

Q. 作業員の放射線管理について、具体策は。

A. 作業に入る前に現場を確実に確認すること、TBM-KYをしっかりと行うこと、事前に認識している状態と現場が違う場合は速やかに報告すること。線量計を必ず確認すること、万一水に濡れたら作業を中断すること、等があげられる。

Q. ヨウ素、セシウムが検出されたということは、やはり炉から漏れ出したものでないか。

A. 空気や海水からも検出されており、今はそれぞれの可能性を否定できない。

Q. 地下にある復水移送ポンプ以外で、復旧が必要な設備は。

A. 電気設備が多く、復旧する必要がある機器は多い。(1~4共)

Q. 配電盤すべてがT/B地下にあるのか。

A. T/B関係の設備の配電盤が多い。

Q. どれくらいの期間で復旧出来るようなものなのか。

A. 一概には言えない。

Q. T/B作業が思うように進まないと感じるが大丈夫か。

A. 想定外の事象が発生することにより、出戻りもある。

Q. 1号のたまり水はヨウ素が少ないと感じる。東電として分析しているか。

A. 現時点では分析していない。

Q. 1号、3号の爆発との因果関係はあるのか。

A. 因果関係については分からない。

Q. 当時の燃料から試算することは出来ないのか。予測出来るのでは。

A. 使用済燃料プールであればいくらか想定出来るが、11日まで運転していた1号機と3号機のヨウ素量とセシウムから、タービン建屋にある水たまりの発生源を特定するのは困難。

Q. 放医研の情報によると、3名が内部被ばくの可能性があるが、東電としてどのように受け止めているのか。

A. このたび3名の方が被ばくされたことについては、大変申し訳なく思う。内部被ばくについては、きちんと評価したい。また、一層放射線管理には気をつける。

Q. 放医研では、作業員は2時間水廻りで作業していたとのことだが、東電はどのように把握しているのか。

A. 現場作業1.5時間で水廻り作業は40～50分と聞いている。

Q. 2号、4号のたまり水の測定はしているのか。

A. 4号については、サンプルを採取済。2号はこれから実施予定。

Q. 2号の中央制御室の照明は夕方点灯予定と聞いていたがどうか。

A. 最終段階で、修理が必要な機器が見つかり修理をすることとなり、本日はなくなつた。

Q. 原子炉への補給を海水から淡水へ切り替えるのが明日になったと聞いたがどうか。

A. タンク内が暗くて確認出来なかったことから、明日にすることとした。不具合による遅延ではない。

Q. 100mSv 超えしている人は17人と聞いているがその後変化あるか。

A. 現時点の人数は把握していない。

Q. タービン建屋のたまり水は津波によるものなのか、もしくは炉水の漏えい等によるものなのか。

A. 現在、現場の状況を整理しているところだが、電源系についてはほとんど水をかぶっている状況で、津波によるたまり水など、何らかの影響によるものではないかと推測しているが、今後、空間線量を把握することである程度の概要が見えてくると思われる。

Q. 原子炉建屋とタービン建屋は水が行き来できる状況になっているのか。

B/B

A. 構造上はつながっているが、二重扉で仕切られている。二重扉部分については、水が流れた形跡はない。また、配管部については行き来できる構造である。

Q. 水素爆発により配管に穴が開いたのではないか。

A. わからない。

Q. プルトニウムは検出する機器がないとのことであったが、1F3のタービン建屋たまり水についてもプルトニウムの有無については確認できていないということか。

A. プルトニウムの有無については確認できていない。

Q. 放射線医学総合研究所では当該作業場所が2～6 mSv との情報があるが、事実関係は。

A. 放射線医学総合研究所の結果については分かりかねるが、当社として把握している積算量は170～180mSv である。

以上